

介護福祉教育におけるターミナルケア —不安要因の検討—

原野かおり・谷口敏代・迫 明仁

Terminal care practices in care-welfare education
— Correlates of changes of anxiety —

Kaori Harano, Toshiyo Taniguchi, Akihito Sako

要約

介護老人福祉施設入所者の重度化に伴い、介護福祉士が終末期の介護に関わる機会が増加している。しかし、介護福祉士の養成教育では、終末期介護（ターミナルケア）に関わる時間数は限られている。さらに、学生の介護実習においては、ターミナルケアの体験をすることがほとんどないのが現状である。本研究では、介護福祉教育におけるターミナルケアの教育指針を得ることをねらいに、人の「死」に関する授業及び実習を行うことで不安がどのように変化していくかを明らかにすることを目的に調査を行った。その結果、授業・実習によってターミナルケアに対する学生の不安についてはあまり変化が見られなかった。しかし、ターミナルに対するイメージについては、暗いイメージから安らかなものであるという意識の変化がみられた。これらの点を受けてターミナルケアに関わる介護福祉士の介護福祉教育においては、ターミナルケアに十分な時間を設けること、介護実習体験を行うことが重要であることを論じた。

キーワード：介護福祉教育 介護実習 終末期介護（ターミナルケア） 不安

I. 緒言

2006年4月の介護保険改正により、介護老人福祉施設においては、入所者の重度化などに伴う医療ニーズの増大などに対応するため、重症化対応加算の新設・看取り介護加算の新設・在宅・入所相互利用加算などが新設された。また、内閣府調査では、子供と同居を考えている高齢者は1995年度の60.9%から2005年度には41.1%に減少しており、高齢者のみの単独世帯が増加傾向にある¹⁾。そのため、高齢者にとっては、介護老人福祉施設が「終の棲家」となることが考えられ、ターミナルケアに介護福祉士がかかわる機会は多くなる。必然、介護福祉士には、高齢者に対する日々の生活介護だけではなく、やがて死を迎える終末期においても、療養を行う医療とは異なる、高齢者の尊厳を保持したターミナルケアが求められる。しかし、介護福祉士教育課程の中、授業科目の目標及び内容の中には、「死」というキーワードはなく、介護概論のみに「終末期の介護」が掲げられて

いる。ただし、使用するテキストによってはその扱いは大きく異なっており、教授するものによっても異なることが懸念されている²⁾。当校においては、介護技術・形態別介護技術・老人の心理でも「死」や「終末期の介護」について扱っているが、時間が限られていることから、系統的な展開はされ難い。さらに介護実習においても学生がターミナルケアに参加することは少なく、「死」について考える機会が少ないのが現状である。

これまで、人の「死」のイメージ³⁾について分析され、死の教育や看取りの体験をすることで人の「死」が受容できるようになることがいくつか報告されている⁴⁻⁶⁾。しかし、人の「死」についての介護教育と介護実習が、ターミナルケアに不安を抱く学生にどのように影響するかについては言及されていない。

そこで本研究は介護福祉士教育におけるターミナルケアの教育指針を得ることをねらいに、人の「死」に関する介護教育と介護実習を行うことで、介護福祉学生がターミナルケアに抱く不安と人の「死」のイメージがどのように変化していくかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 調査方法

調査対象は本学健康福祉学科生活福祉専攻2年生52名のうち授業に出席した48名とした。調査日は2006年6月14日「介護技術：終末期の介護」の授業前・後と2006年7月29日介護実習Ⅱの学内反省後に実施した。調査内容は以下の通りとし、集合質問式で実施した。

2. 調査内容

新版 STAI (State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ)^{7,8)} 40項目、「ターミナル」からうけるイメージ (自由記述)、家族や親友など重要な人との死別体験の有無、実習中のターミナル経験の有無について調査することとした。

1) 新版 STAI (State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ)

Spielberger (1966) によって開発され、改訂が重ねられた日本語版新版 STAI (肥野田ら 2000) を使用した。個人の特徴である「特性不安」20項目、不安を喚起する事象に対する一過性の状況反応である「状態不安」20項目の2種類の尺度で構成されている。各項目は1点から4点までの重み付けが与えられており、各尺度の得点は最低10点から最高40点までの間に分布する。標準得点に変換した上で、段階1から段階5までに区分される。なお、段階4・5は高不安、段階1・2は低不安と判定するのが一般的とされている。また、大学生の標準標本の平均は尺度全体で男性の「特性不安」の平均48.82 (SD10.03)、「状態不安」の平均47.27 (SD10.45)、女性の「特性不安」平均47.65 (9.96)、「状態不安」の平均45.94 (SD10.25) とされている。

2) ターミナルのイメージ

「ターミナル」という言葉から受けるイメージを探るため、授業の前と介護実習 (介護過程の展開) 終了後に自由記述を求めた。

3) 死別体験

家族や親友など重要な人の死を看取ったことがあるか、家族や親友など重要な人との死別体験があるか、事故や災害の現場で死者（遺体）を目撃したことがあるか、今までの実習で看取り介護の体験があるか、そのような経験は全くないの5項目から、複数回答可能での回答を求めた。

実習終了後は、「ターミナルケアの体験の有無」と「死後のケアへの参加の有無」について回答を求めた。

3. 分析方法

分析には「介護技術：終末期の介護」を受講した48名のデータを使用した。

「終末期の介護」の講義を受けることによる「状態不安」の変化を確認するために新版 STAI を授業前後で行った。新版 STAI は個人の情緒やパーソナリティとしての不安を明らかにすることが可能であるために採択した。講義の前後での「状態不安」の差の検定を行うとともに、「特性不安」の程度によって「状態不安」の変化を確認することとした。「ターミナル」に対してのイメージは自由記述形式の回答結果をテキストマイニング法の処理ソフトである「トレンドサーチ Ver.1」を用いて、キーワードの関連や傾向を分析することとした。さらに「状態不安」とその要因とのつながりについての傾向を確認するために、「特性不安」「授業前の状態不安」「授業後の状態不安」「身近な人の死の体験」「介護実習でのターミナル経験の有無」「介護実習でのターミナル経験の有無」を変数として用い、クラスター分析（自己組織化マップ）を行い個人の分類を行うこととした。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性などの分布

対象者48名のうち男子学生は9名、女子学生は39名であった。

「重要な人の死を看取ったことがある」11名(23%)、「重要な人との死別体験がある」25名(52%)、「経験なし」12名(25%)、このうち複数回答で「事故や災害の現場などで死者（遺体）を生で目撃したことがある」3名、「1年次の実習中に看取りの介護を行ったことがある」5名であった。

2. 不安の分布

「特性不安」(n=48)の平均は53.7(範囲30-73, SD9.1)で、授業前の状態不安の平均は48.6(範囲24-67, SD9.58)、授業後の状態不安は平均46.8(範囲29-80, SD9.3)であった。

男女の内訳は、男子学生(n=9)の「特性不安」平均51.3(範囲36-65, SD10.3)、授業前の「状態不安」の平均は51.2(範囲42-61, SD7.1)で、授業後の状態不安は平均45.3(範囲33-57, SD8.1)であり、女子学生(n=39)の「特性不安」平均54.3(範囲30-73, SD8.8)、授業前の「状態不安」の平均は48.0(範囲24-67, SD10.1)で、授業後の「状態不安」の平均は47.0(範囲29-80, SD9.6)であった(表1)。授業前後による「状態不安」の平均の差に有意差は見られなかった。

なお、「特性不安」を3群(高群・中群・低群)に分けると、「特性不安」の高いものは「状態不安」も高い傾向がみられた(表2)。

表1 不安の分布

		単位:点	平均値	範囲	標準偏差
全体	n=48	特性不安	53.73	30-73	9.05
		状態不安:前	48.63	24-67	9.58
		状態不安:後	46.77	29-80	9.31
男性	n=9	特性不安	51.33	36-65	10.27
		状態不安:前	51.22	42-61	7.08
		状態不安:後	47.10	33-57	8.12
女性	n=39	特性不安	54.28	30-73	8.80
		状態不安:前	48.03	24-67	10.05
		状態不安:後	47.10	29-80	9.63

表2 各群別不安分布

		単位:点	平均値	範囲	標準偏差
高群	n=22	特性不安	61.23	55-73	5.44
		状態不安:前	53.50	34-67	9.14
		状態不安:後	51.36	33-80	10.35
中群	n=20	特性不安	49.90	45-54	3.61
		状態不安:前	46.10	35-64	7.11
		状態不安:後	43.90	31-53	6.09
低群	n=6	特性不安	39.00	30-44	5.48
		状態不安:前	39.17	24-47	9.11
		状態不安:後	39.50	29-47	5.89

* 高群≥55 中群35~54 低群≤35

3. 「ターミナル」のイメージに関するテキストマイニング

事前調査Aと事後調査Bを視点として関連するキーワードの結びつきを視覚化するコンセプトマップ分析を行った(図1)。その結果、事前調査Aは、「暗い」-「悲しい」-「苦しい」が強い結びつきとしてマッピングされた。他の大きな結びつきとして「寝たきり」や「わからない」があった。一般的にネガティブあるいは理解されにくい様子が示されていた。

事後調査Bでは、「末期」と強く結びつき、「安らか」-「静か」とも強く結びついている。その他、「死」を中心とするノート群や「準備」「段階」「時間」などの語群も見られ、「安らかな」「死への対応」がみとられた。

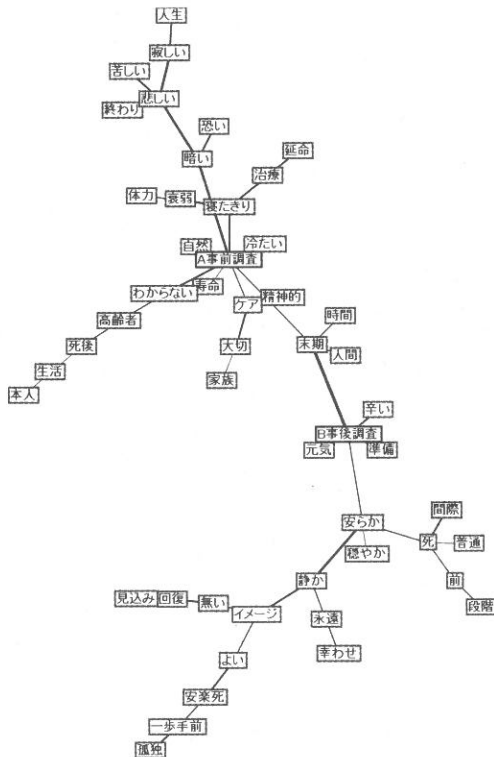


図1 コンセプトマップ:「ターミナル」のイメージ

4. クラスタ分析 (自己組織化マップ)

「特性不安」「授業前の状態不安」「授業後の状態不安」「身近な人の死の体験」「介護実習でのターミナル経験の有無」「介護実習でのターミナル経験の有無」の6項目を変数として自己組織化マップによるクラスタ分析を行った結果、学生集団はおおむね4群のクラスタに分類できた。4群の内容は1群:死別体験はないが不安得点が高い、2群:何らかの死別体験があり不安得点も高い、3群:死別体験なく不安も低い、4群:何らかの死別体験があるが不安は低かった。自己組織化マップに示されたベクトルは、縦軸(主成分2)に性別と死別体験を示し、横軸(主成分1)は不安の強さを示している(図2)。

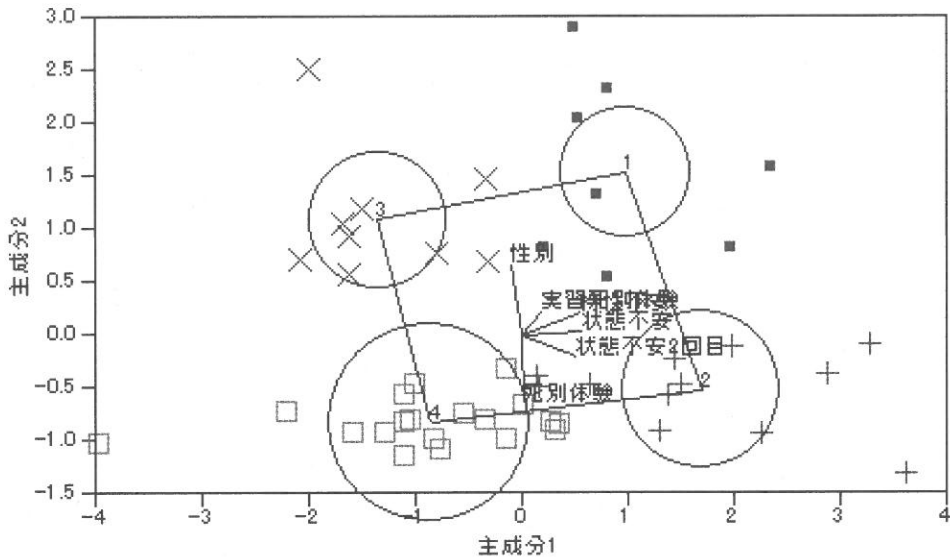


図2 自己組織化マップ

IV. 考察

本研究は介護福祉教育におけるターミナルケアに対して学生が「死」に関する授業や実習を受けることで不安がどのように変化し、「ターミナル」ということから受けるイメージが変化するかを明らかにすることを目的とした。

人の「死」に対する学生の抱く不安は、「終末期の介護」の授業によっては、有意な変化を示さなかった。特性不安の高い学生は状態不安も高い傾向があり、個別対応による分析が必要となる。これまで、ターミナルケアや死後のケアは医療で行われてきた。そのため、介護福祉士がターミナルにかかわることを意識せずに入学者もいる。したがって、ターミナルケアを受け入れることが困難な学生がいると思われ、ターミナルケアについて実習中や実習指導を通して個別に対応・指導することが必要となる場合があると考えられた。

「ターミナル」のイメージについては、抽象的な質問であるが、一般に「ターミナル」＝「死」で暗いイメージ^{3,8,9)}を抱いていることが判明した。強い結びつきの部分に着目すれば、イメージの変化は授業前が「暗い」－「悲しい」－「苦しい」という一般的な「死」に対する暗いイメージであった。しかし、授業及び介護実習終了後では、「末期」と強く結びつき、「安らか」－「静か」とも強く結びついていた。ターミナルということに対しては授業前も後も重く捉えているが、授業及び実習終了後には、死にゆく人に対して静かに看取るという意識や現実的に考えようとする意識が生まれていることが推察された。今の時点では「自分自身の死」はとても考えられないとした学生もおり、人の「死」について実習体験で考える機会があっても、自分の死として直接向き合うことはできないことが示唆された。

自己組織化マップでは、4つのクラスターに分類して検討した。クラスターは概ね不安と死別体

験で4群に分類することができた。不安と関係するいくつかの要因との関係性をみてみると、性別や死別体験は不安とは直接の関わりはないことが、そのベクトルの方向性と強さから明らかとなった。実習体験は不安には関わりがあったが、ベクトルが短いことから強い関係性はないものと考えられた。しかし、実習体験者が少ないことが影響した可能性があるため、これらの結果の解釈には慎重であることが望ましい。

本研究の調査結果により、ターミナルケアの授業によって、人の「死」に対する学生の不安が増強されることは見られなかった。したがって、終末期から死後のケアに至るまでのターミナルケアの具体的な介護方法を教育することは、学生の人の「死」に対して考える機会となり、全人的な理解や尊厳を保持することを理解させることにつながり、介護福祉士として求められている「尊厳を支えるケアの実践」を可能とするものであるともいえる。

介護実習でのターミナルケアの実習や看取りに関しても、状態不安への強い影響が認められなかったため、積極的な実習体験が可能であることが明らかになった。

介護福祉教育におけるターミナルケアについては、学校での授業だけでなく、介護観・死生観を養うためには実習における体験が重要な意味をもっている。実際に就職すれば現場でターミナルケアに関わる機会が多いものと考えられる。しかし、本学の実習施設で終末期の介護や看取りの実習が可能な施設は今のところ1施設に限られている。全ての学生にターミナルケアに関わる機会を得てもらうためには、実習体験の環境を整備することが今後の課題と思われた。学生の不安や実習体験による不安の増強の対応には、事前に「特性不安」などを把握し、死別体験があり不安得点も高い学生には、対象者との関係性や悲嘆の程度を把握しておく事も必要であろう。

以上のことより、介護教員は、学生一人一人の特性を踏まえ、実習巡回やスーパーバイザーとしての確な役割を果たし、ターミナルケアに不安を抱かない介護福祉士の育成に留意することが必要であると考えられた。

謝辞

本研究の調査を行うにあたりご協力していただきました13期生の学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 1) 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付少子・高齢化対策担当:高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査結果, 2005.
- 2) 小櫃芳江:介護福祉教育における死の教育に関する一考察—養成課程における死の教育の現状と課題—, 聖徳大学研究紀要, 37, 9-19, 2004.
- 3) 藤井美和:大学生のもつ「死」のイメージ:テキストマイニングによる分析, 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-154, 2003.
- 4) 橘 尚美:医療を支える死生観—医師へのインタビュー調査を通じて—, 関西学院大学社会学

- 部紀要, 97, 161-179, 2004.
- 5) 和田晴美: 介護学生の死生観及び死の不安に影響を与える要因の分析. 佐野短期大学研究紀要, 17, 103-116, 2006.
 - 6) 渡辺きよみ, 野村和子: 介護学生の死生観に影響を及ぼす要因の検討. 大阪体育大学短期大学部研究紀要, 7, 73-81, 2006.
 - 7) 肥田野 直, 福原真知子, Charles D Spielberger ほか: 新版 STAI マニュアル. 実務教育出版, 2000.
 - 8) 松原達哉: 最新 心理テスト入門 - 基礎知識と技法習得のために -, 日本文化科学社, 1995.
 - 9) 藤原芳朗: 介護福祉教育において「死」をどう教えるか. 旭川荘研究年報, 32 (1), 2001.
 - 10) 小河育恵, 齊藤美智子: 介護福祉養成施設教育における死の教育 - 学生の死に対する意識調査を通して -. 介護福祉教育, 2 (1), 38-41, 1996.

〔2006年10月31日受付〕
〔2006年12月25日受理〕